

所功教授収集・寄贈の皇室関係資料解説

橋本 富太郎
久禮 旦雄

序説

公益財団法人モラロジー道德教育財団（旧称モラロジー研究所）道德科学研究所（道科研、旧称道德科学研究所センター）の伝統文化研究室及び「皇室関係資料文庫」では、皇室に関する資料・情報の整理を行ってきた。その大半は既刊の出版物、デジタルデータなどである。

財団の創立者である廣池千九郎は、二十七歳で『皇室野史』（明治二十六年）を著し、やがて『古事類苑』編纂員となった際に国学者井上頼圀の示唆を受け、「世界中の君主は数代もしくは数十代にして滅亡するのに、日本の皇室は何故に万世一系であるか」という問題を研究課題として与えられた（『回顧

録』）。

その後、神宮皇學館教授時代に著した『伊勢神宮』（明治四十一年）では、皇室の万世一系を、皇祖天照大神の古伝と歴代天皇の事績にみられる道德性の高さによるものと論じた。

その成果は、『道德科学の論文』（昭和三年）においてもより展開される。そこで廣池は世界の五大道徳系統の中に皇室を位置づけることでより普遍化することを試み、さらに皇室を「国家伝統」とし、報恩の対象として「親・祖先」「精神的指導者」と並列することで、道德の具体的実践として皇室への奉仕を位置づけた。また廣池自身もそれを実践し、「私の一生の事業は我万世一系の国体を擁護し奉って行かうと云う事の外何物をも含まなかった」（『予の過去五十七年間における皇室奉仕の事蹟』）と述べている。

財団では、このような廣池の遺志を受け継ぎ、皇室に関する研究と教育を継続してきた（美和信夫『天皇研究』など）。

さらに平成二十四年度から所功教授・研究主幹（現・客員教授）を中心として「皇室関係資料文庫プロジェクト」を発足させ、資料の収集・研究・発信に努めている。

そのコレクションとしては、まず平成二十五年に研究所（旧研究センター）に一括寄贈された故・高橋紘静岡福祉大学社会学部教授の蔵書がある。

高橋氏は元共同通信の記者で、皇室ジャーナリストとして、『現代天皇家の研究』（講談社、昭和五十三年）、『象徴天皇』（岩波新書、昭和六十二年）、『陛下、お尋ね申し上げます―記者会見全記録と人間天皇の軌跡』（文春文庫、昭和六十三年）、『象徴天皇と皇室―日本国憲法・検証 1945―2000 資料と論点 第二巻』（小学館文庫、平成十二年）、『象徴天皇の誕生―昭和天皇と侍従次長・木下道雄の時代』（角川文庫、平成十四年）、『平成の天皇と皇室』（文春新書、平成十五年）、『昭和天皇 1945―1948』（岩波現代文庫、平成二十年）、『人間昭和天皇』（上・下 講談社、平成二十三年、遺著）などがあり、所功氏との共著に『皇位継承』（文春新書、平成十年、増訂版、平成三十年）、共編に皇室事典（角川学芸出版、平成二十一年、増訂版、令和元年／角川ソフィア文庫全二巻、令和元年）などの著作がある。

その生涯をかけて収集された皇室関係の書籍、取材記録などは近現代の皇室を研究する上で有益な内容を多く含んでいると言える。また同年、所功氏から日本史関係の蔵書が寄贈され、これにより日本の歴史全体に及ぶ皇室関係の基本的文献への研究所内でのアクセスが容易となったことは喜ばしい。

さらに、平成二十九年・三十年には『寛政新造内裏還幸行列絵図』と「光格天皇宸筆「勅題・勅点」資料」が購入・所蔵され（所功『光格天皇関係絵図集成』令和二年、国書刊行会参照）、またこのたび（令和三年）、所功氏所蔵の近世天皇に関する史資料（宸筆・絵図）が寄贈されるに至った。

ただ、これら史資料の収集・研究はあくまでプロジェクトの一部であり、その中心は現在、さまざまな大学・研究所・図書館・文書館・博物館・史料館などの機関が出版・ウェブサイトなどで公開している皇室関係研究・史資料に関する情報の収集・整理・公開にある。その内容についてはウェブサイト「ミカド文庫」において発信を続けている。また、平成三十年にはシンポジウム「皇室の歴史と廣池千九郎」を開催し、その成果は『皇位継承の歴史と廣池千九郎』（平成三十年、モラロジー研究所）として刊行された。

そして、これらの成果を踏まえて、恒常的な人材の確保・育成、重要な史資料の収集・研究・発信を組織的に展開するため平成三十一年四月に設立されたのが「伝統文化研究室」であ

る。当研究室では、関連領域の碩学を客員研究員に迎え、専門的な研究会を重ねるとともに、その成果を展示や講演会を行い、発信している。それらをまとめたものとして、『モラロジ―研究』第八十四号・八十五号に掲載された講演記録「御大礼の来歴と意義」がある。

なお、令和三年からは、道科研の研究室体制がすべてプロジェクトに移行した関係で、「伝統文化研究室」は「伝統文化研究プロジェクト」に名称変更されたが事業内容に変更はない。

皇室関係資料文庫プロジェクト・伝統文化研究室の設立・活動において一貫してご尽力いただき、ご指導をいただいていた所功客員教授は、本年度で研究所の務めに区切りをつけられるが、今後ともプロジェクトは活動を続け、廣池千九郎の精神を継承し、発展・発信していく予定である。

(橋本富太郎)

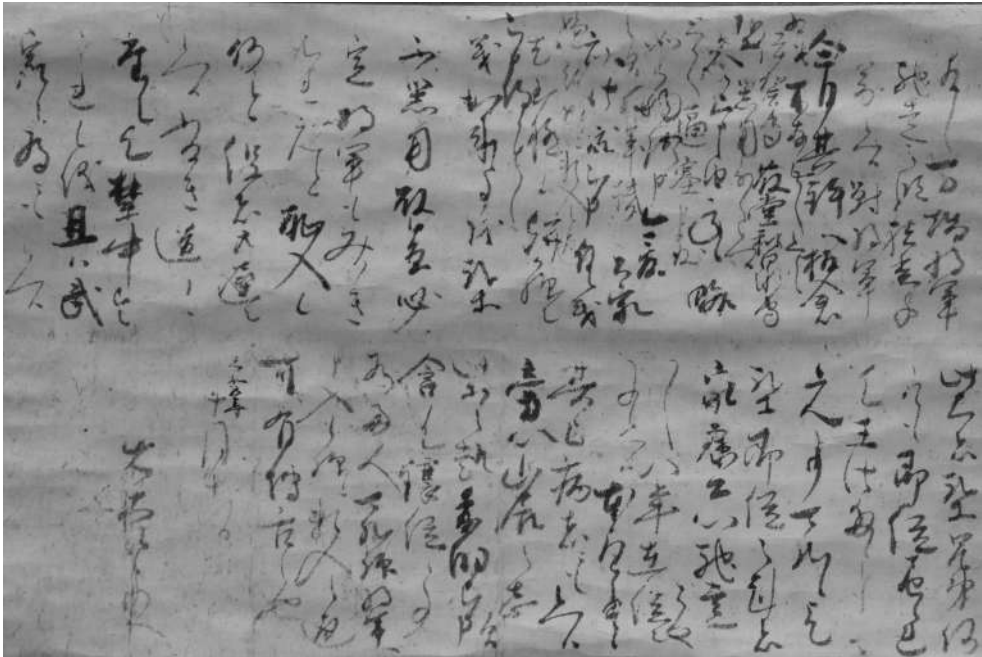
各説 近世の宸筆と関係の絵図

長らく皇室史を研究してきた所功教授が二十数年前から収集された近世天皇に関する史資料(宸筆・絵図)は、皇室を理解するための貴重な情報を含んでいる。その数点が当研究所に寄贈されることになった。それらの史資料については、それぞれ個別に所功氏自身の研究論文・史料紹介が『モラロジ―研究』に掲載されている。ここではそれをもとに、それぞれの要点を簡単に解説する。

一、後水尾天皇の近衛信尋宛て宸翰

第一〇八代の後水尾天皇は、文禄五年(一五九六)、後陽成天皇の三男として誕生(母は関白近衛前久女、女御近衛前子Ⅱ中和門院)され、慶長十六年(一六一一)に父帝の譲りを受けて践祚・即位された。それから十九年在位の後の寛永六年(一六二九)、女宮興子内親王(明正天皇)に突如として讓位され、延宝八年(一六八〇)に八十五歳で崩御された。

そのご事績としては、在位中、徳川幕府の干渉に苦慮された。文化においては朝儀の復興に努められ、自ら『当时年中行事』という儀式書を著された(このほか、四十余のご著作がある)。文芸を深く好まれ、自ら『源氏物語』などの古典を侍臣



後水尾天皇宸翰

に講じられ、和歌・連歌・漢詩・書道・茶道・華道・香道・絵画にも長じておられた。また、修学院離宮が天皇の計画・設計になることはよく知られている。

後水尾天皇の御宸筆は、帝国学士院編『宸翰英華』にまとめられているものだけで一五〇点にのぼる。しかし、そこにも未収録の御消息が京都の古書店に出たのを直ちに所教授が購入されたものこそ本史料である。その目録に「後水尾天皇宸翰御消息 一軸／（元和五年）十月十八日付 右大臣（近衛信尋）宛／大正十五年 今泉雄作鑑定書付／本紙、縦31・7糎 横48糎／総丈110糎 横56・2糎。軸装 箱入」と記されている。

この御消息については、『大日本史料』元和五年（一一六一）十月十八日条に引載されているので、全く未知のものであったわけではない。しかし、同書には「『京都御所東山御文庫記録』乙一／宸翰掛引継第一号之内……」（勅一〇一―二―一）とあり、東山御文庫の御物を明治時代に史料編纂掛が忠実に謄写したもので、本史料と若干の異同がある。

この宸翰を送られた近衛信尋は、後陽成天皇の第四皇子として生まれ、のちに近衛信尹の養子となり、近衛家十九代目当主として、関白・左大臣を務めている。後水尾天皇にとっては信頼できる年下の実弟である。

宸翰の内容は、当時右大臣であった信尋のもとに「板倉伊賀守」（京都所司代板倉勝重）・「藤堂和泉守」（伊勢・津藩主藤堂

高虎)が申し入れに来たことを聴いている、とした上で、慶長二十年(元和元年(一六一五))の幕府による「公家衆法度」(禁中並公家諸法度)の制定について、「尤至極候」とする。『大日本史料』引載「御消息」では、この後に、「我等不器用故ニ候条、必定、將軍もみかぎられ候ハんと恥入候」と、法度に背くようなことが多く將軍(徳川秀忠)から見限られるかもしれないと恥じ入っていると述べられ、「役者共」(担当者たち)が「遅々」としていているため、「ふるき道もたえ」「禁中すたれ」することは「武家ノ為」にもよくない、と危惧をもらされている。

ついで、「此の上は我等兄弟何れニても即位させられ候て、王法たゞしく候ハん事」、即ち後水尾天皇ご自身の譲位によって「王法」(皇位のあり方)を正しくなるようにすべきであるとし、「家康公」(徳川家康)の「馳走」(助力)による自らの即位から八年が経ち、関白(二条昭実)が病死したこともあり、「山居之志」(隱居の意志)があるので、どうか「譲位」の意志を板倉・藤堂を介して將軍のほうに申し入れてほしい、と述べられている。つまりこの御消息の目的は、譲位の意志を弟の近衛信尋を通じて幕府に伝えることにあつたといえる。

ここでの後水尾天皇の譲位の意志は、自らの皇后としての徳川和子(のちの東福門院)入内と関わって示されたものと思われる。元和四年・五年に天皇と典侍との間に皇子・皇女が儲けられると、既に自身とその正室であるお江(お江与)の娘・和

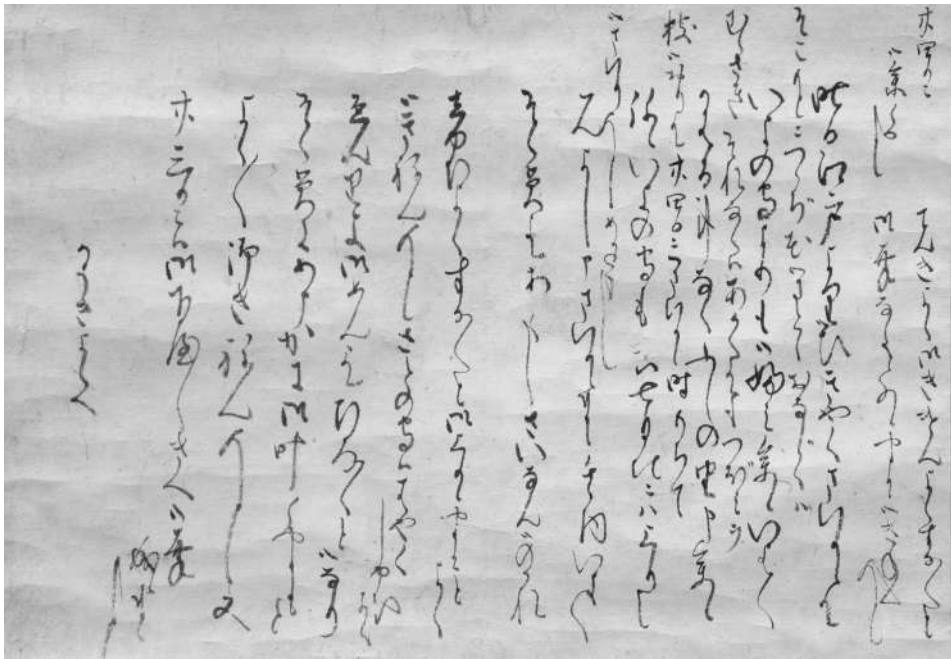
子の入内の内定を勅旨として得ていた將軍秀忠はこれを不快とし、天皇の側近たちを流罪・出仕停止とした(およつ御寮人事件、または万里小路事件)。この過程において、後水尾天皇は近衛信尋を介して自らの譲位・出家の意志を示された。その際に出されたのが当該史料である。

この中における「公家衆法度」(禁中並公家諸法度)についての言及は、幕府による朝廷への介入について、ご自身の在り方を反省される一方で、幕府への強い抗議の意図も読み取れる。これを受けて幕府は藤堂高虎が秀忠と協議を行い、天皇に対しても公家衆が説得に努め、結局天皇が譲位の意志を撤回され、元和六年(一六二〇)六月に徳川和子の盛大な入内の儀式が行われることにより、事件は一応の解決を見たのである。

二、明正上皇の「かうぎやく(こうぎよく)宛て書簡

第一〇九代の明正天皇は、後水尾天皇と皇后徳川和子(東福門院)の間に第二皇女として元和九年(一六二四)に誕生された。寛永六年(一六二九)の十月二十九日に内親王の宣下を受け、同年十一月八日、後水尾天皇の突然の譲位を受けて踐祚された。

それから父帝の院政のもとで十五年在位の後、寛永二十年(一六四三)弟君である紹仁親王(後光明天皇)に譲位された。その後、五十四年間、上皇として長寿を保ち、元禄九年(一六



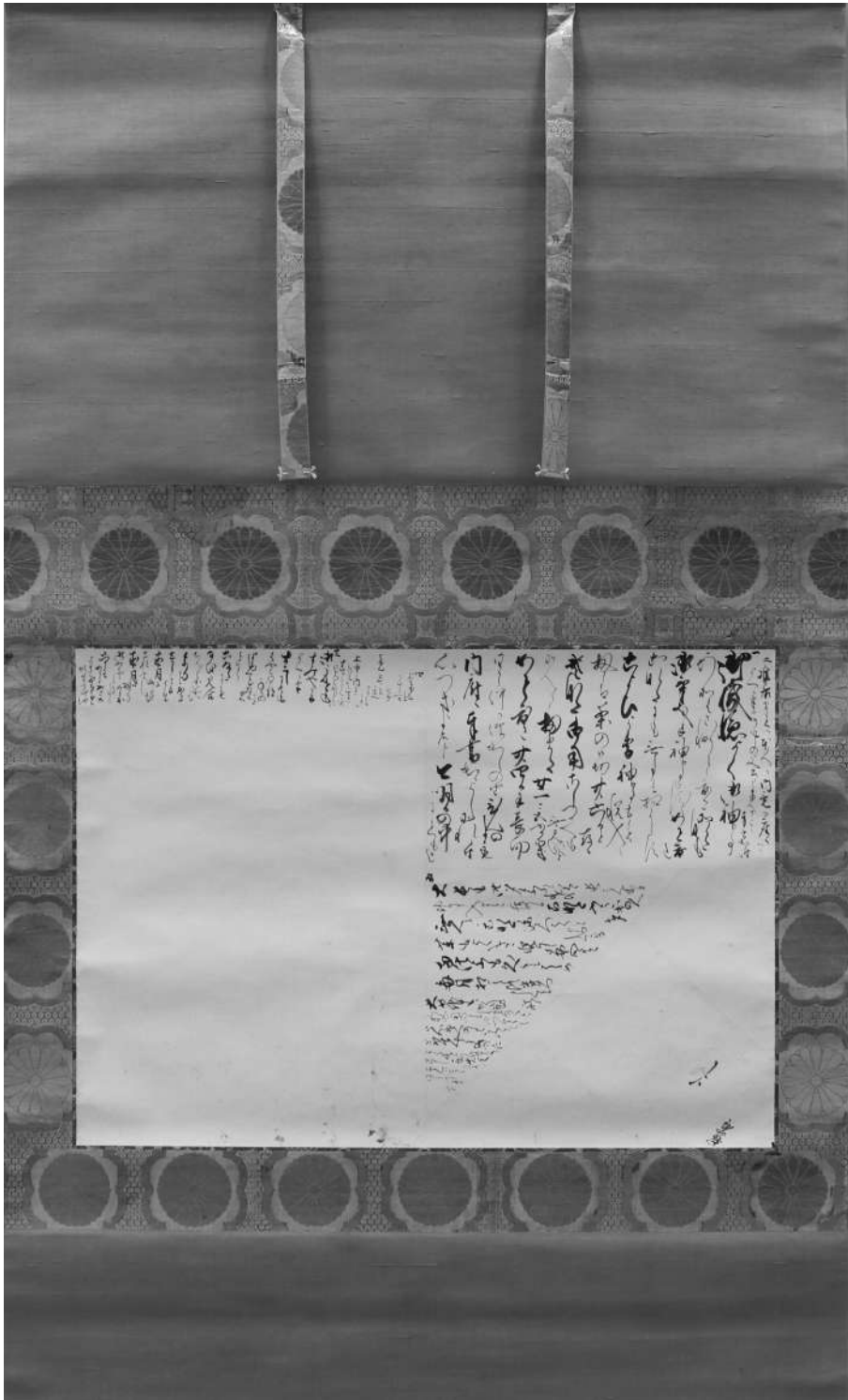
明正上皇消息

九六) に七十四歳で崩御された。

明正天皇は寛永二十年、数え二十歳で讓位されるころから、京都山科の十禅師を承応二年(一六五三)に中興した僧侶の真慶法師に帰依された。その真慶法師は「かうぎやく」(紅玉・紅曲・紅玉)と号しており、この「かうぎやく」(こうぎやく)宛ての明正上皇の宸筆御消息が、讓位のところから七十歳で崩御される直前まで、全部で十通が確認されている。

その内容は、「女五の宮様」(明正上皇の同母妹賀子内親王)や「いよの守・さどの守」(上皇付の「禁裏付武家」である神尾守政と京都所司代小笠原長重)とその「御ないぎ(内儀)」「子たち」など上皇に近い立場の人々の「そく災」(息災)や、江戸からの飛脚が何度も来る中での、何らかの問題が「首尾よく」解決することを「御きねん」するように伝えているほか、「禁中様」(今上天皇⇨後西天皇か)のもとで「ゆい(憂)事」が続くので、「今年は御たたり(崇)年」ではないかと、月のふちに色のついた雲が見えたこと、御所の屋根の上に燕が巣をかけたことの意味を尋ねると共に、宸筆の「渡唐天神像」や鎌倉の長谷観音の「御そぎ木」で作らせた「ちいささまもり本尊」を奉納・下賜される意志なども示されている。

このように明正上皇は「かうぎやく」⇨真慶法師を信任され、親しみを込めた御消息を送られていたことがわかる。そして所教授は、右のほかに「かうぎやく」宛ての書簡を京都の古



後桜町天皇宸翰

書店で発見・入手された。それは今のところ、既刊の書籍には収録されていない。本紙は縦三一・三cm、横四三・五cmで軸装されており、保存状態もよい。「明正上皇 宸筆御消息」との箱書が中村直勝博士（京都帝国大学教授）の達筆にて記されている。

その内容は、江戸からの飛脚にて「いよの守」（禁裏付武家）神尾守政）の上京と、何らかの事情で公務から離れていた「さどの守」（京都所司代小笠原長重）の復帰について記し、それぞれ無事であることを「御きねん」し、また十禅寺にある「つゞぢ花」があれば、禁裏内に建てられた「御下やしき」への上皇の御幸の際に持参すること、またその御幸が無事にできることを「御きねん」することも依頼されている。この中に登場する神尾・小笠原の在任期間から元禄四年（一六九一）閏八月から翌五年六月の間に出された消息であると推測される。

この内容からは、後水尾天皇の皇女であり、同時に徳川秀忠の孫（東福門院の娘）である明正天皇が、譲位後も江戸幕府と良好な関係を築かれながら、山科十禅寺の真慶法師「かうぎやく」に深く帰依されていたことが読み取れる。

三、後桜町天皇の九条尚実宛て宸翰

第一一七代の後桜町天皇は、江戸時代、二人実在した女帝の御一方である。元文五年（一七四〇）に桜町天皇の第二皇女と

して誕生され（母は関白二条吉忠女、女御二条舍子＝青綺門院）、寛延三年（一七五〇）に内親王の宣下を受けられた。そして宝暦十二年（一七六二）、弟君の桃園天皇が二十二歳で病没されると、儲君英仁親王（五歳）の成長まで皇位を継ぐことになり、踐祚された。やがて明和五年（一七六八）に英仁親王を皇太子とし、同七年に譲位された。しかし、即位された後桃園天皇が安永八年（一七七九）、生まれて間もない皇女欣子内親王を残して崩御された。そのため、将来欣子内親王を皇后とするにふさわしい皇族を探し、閑院宮典仁親王の六男である兼仁親王（光格天皇）を迎えた。後桜町上皇はその際、朝廷の意見集約に努め、また即位後の光格天皇の後見役・教導役として尽力し、文化十年（一八一三）に七十四歳で崩御された。

平成二十四年（二〇一二）、京都国立博物館において開催された特別展「宸翰 天皇の書」に「後桜町天皇宸翰御消息」が出品された。同特別展図録には「一幅／紙本墨書／縦四六・七横六五・五／江戸時代 天明四年（一七八四）」と記されている。この宸翰の所蔵先は図録に記されていないが、平成三十一年に京都の古書目録に出たことを見つけた所教授が直ちに購入された。その箱書には「後桜町天皇宸翰御消息〔御機嫌よく 撰政九条尚実宛〕」「昭和丙辰文月 是澤恭三 謹題」とあり、昭和五十一年（一九七六）に宮内省図書寮御用掛、文化庁文化財審議会専門委員（書跡部門）などを務められた是澤恭三

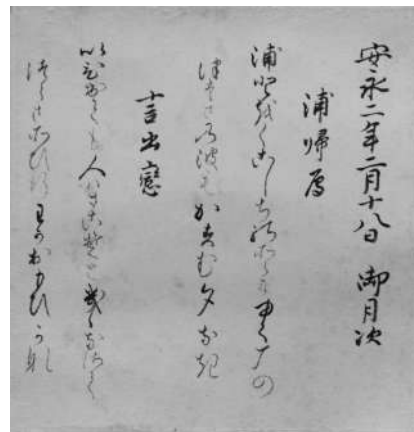
博士が記されている。

この宸翰は「撰政殿」九条尚実に宛てたものであり、その中で「女一宮ふかそぎ めで度さ」と記されていることが注目される。「女一宮」とは後桃園天皇の皇女で、光格天皇の中宮に立てることを予定して養育された欣子内親王（新清和院）のことで、天明四年（一七八四）に数え六歳で「深曾木」（髪の毛を削ぎ揃え成長を祝う儀式）が行われている。宸翰が書かれたのもこの時期であろう。

後桜町上皇はこの「深曾木」において「鬢親」（髪・鬢の先を削ぐ役）を内大臣近衛経熙（欣子内親王の伯父）が務めること、その指南を経熙の父であり、光格天皇の擁立に際して後桜町上皇の相談役であった前関白近衛内前に求めていることを記されている。ここからは新帝光格天皇の後見役として、その中宮となる欣子内親王の成長を見守られていた上皇のお心遣いを具体的に知ることができる。

四、後桜町天皇の御製（和歌）模写

後桜町天皇の宸翰の模写である。箱書には「後桜町天皇 一仙洞御所御歌会 詠草 自安永三年二月／至同年四月 堀江和彦」とあり（箱は縦横一〇cm、長さ五〇cm）、書の研究で知られる堀江和彦氏によるものである。安永二年（一七七三）に御所で行われた月次（月ごと）の歌会の際の、後桜町天皇・関白



後桜町天皇御製（和歌）模写

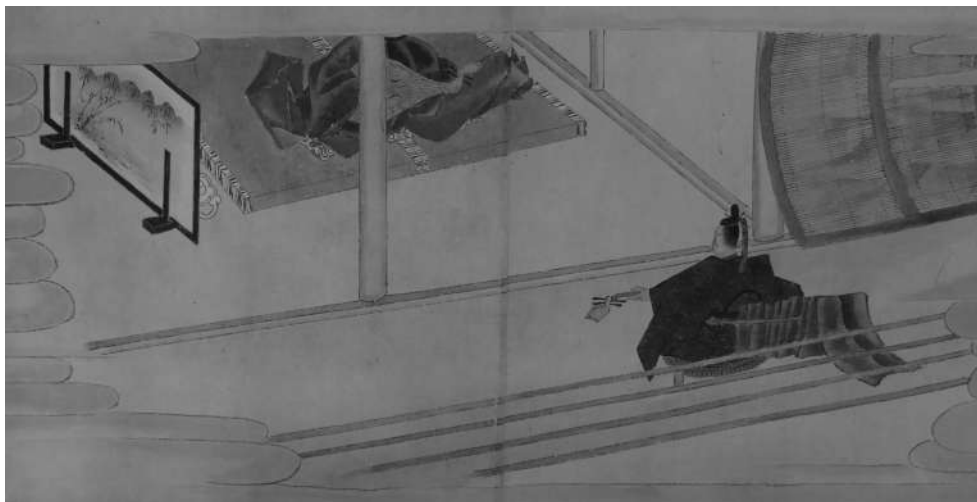
近衛内前・右大臣九条尚実・右大臣の鷹司輔平の歌が記されている。そのうち、「浦婦原」「言出戀」という題についての後桜町天皇の歌を以下に示す（所功氏による釈文を、樋口百合子の示教により一部補正）。

浦婦原／浦とをく こしちのそらにゆく鷹の つばさの波
も かすむ夕なぎ

言出戀／いひ出ても 人はさこそとき、なさて つらきそ
ひ行 わがおもひかな

五、「光格天皇御琵琶始之図」

第一一九代の光格天皇は、明和八年（一七七二）、閑院宮典



「光格天皇御琵琶始之図」(上、光格天皇／下、西園寺賞季)

仁親王(東山天皇皇孫)第六子として誕生された。当初出家して聖護院門跡を継がれる予定であったが、安永八年(一七七九)に後桃園天皇が崩御されると、その当日天皇の養子として皇嗣に立てられ、踐祚された(なお光格天皇の生母は大江磐代であるが、皇嗣とされた際に後桃園天皇の女御である近衛維子Ⅱ盛化門院の養子となっている)。寛政六年(一七九四)に欣子内親王(後桃園天皇皇女)を皇后(中宮)とされた。その在位中には石清水・賀茂臨時祭や新嘗祭の再興、寛政の内裏復興など幕府(老中松平定信)との交渉の上での旧儀の復興、朝廷の権威の向上に努められておられる。

そのような旧儀の復興のひとつとして行われたのが「琵琶始」である。そもそも歴代天皇の中で琵琶を重んじられたのは、鎌倉時代の後鳥羽天皇とその篤い信頼を受けた順徳天皇である。その後、承久の変により後鳥羽上皇が隠岐、順徳上皇が佐渡に遷されたが、皇位は後鳥羽上皇の孫である後嵯峨天皇に継承され、それに伴い琵琶の秘曲は後嵯峨天皇の子孫である持明院統の歴代天皇を中心に継承された(同じく後嵯峨天皇の子孫である大覚寺統でも、その継承は重視されている)。その後、皇室における琵琶演奏の伝統は、南北朝時代の崇光天皇の子孫である伏見宮家に受け継がれたが、応仁の乱以降、琵琶の演奏や秘曲の伝承は行われなくなったようである。

この伝統を復興するために、寛政九年(一七九七)五月二十

六日、光格天皇により行われたのが「琵琶始」である。当時二十七歳の光格天皇は、あらかじめ「御師範」とされた前右大臣西園寺賞季に命じて「萬歳楽」の楽譜を献せしめ、稽古をされた上で当日、御引直衣・御単・御内袴を召され、清涼殿において西園寺賞季から「萬歳楽」の伝授を受けられた。その後、賞季には「御請文」と禄が授けられ、さらに関白鷹司政熙（閑院宮直仁親王の孫、光格天皇の従兄）、弾正尹である閑院宮美仁親王（光格天皇の異母兄）、聖護院宮盈仁法親王（光格天皇の同母弟）などの公家たちが参集して、管弦を奏し、また天皇自らも琵琶を演奏されている。

「光格天皇御琵琶始之図」一軸（二七cm×八m四〇cm）は、この様子を絵画化した紙本着色の絵巻であり、平成三十一年（二〇一九）に所教授が古書店から購入したものである。「琵琶始」の様子が描かれるとともに、詳細な詞書が付されており、それも所氏により翻刻されている。

なお、皇室関係資料文庫には、このほか『寛政新造内裏還幸行列絵図』と「光格天皇宸筆「勅題・勅点」資料」が所蔵されている。ともに所功氏が古書目録で見つけられたもので、所功編『光格天皇関係絵図集成』（令和二年、国書刊行会）に写真・解説が収録されている。

主な参考文献

1. 宮内省編『天皇皇族実録』「後水尾天皇実録」「明正天皇実録」「後桜町天皇実録」「光格天皇実録」（写真複製本、ゆまに書房、平成二十二年）
2. 所功「後水尾天皇の宸筆に見る深慮と訓戒書」『モラロジー研究』八七号（令和三年）
3. 所功「明正上皇と後桜町上皇の宸筆御消息」『モラロジー研究』八六号（令和三年）
4. 所功「光格天皇御琵琶始之図」に関する覚書」『モラロジー研究』八五号（令和二年）
5. 所功『光格天皇関係絵図集成』（国書刊行会、令和二年）
（久禮巨雄）

